

2017年9月3日(日)

説教:「先祖の信仰を受け継ぐ」

聖書:士師記2:16~23

「士師」の時代は、かつてイスラエルの民がエジプトを出て、荒野の40年の旅を終えカナンの地に定住し、まだイスラエルに王がないころの時代。十二部族連合体として国が維持されていたころ。しかしこの時の民は、先祖の信仰を受け継ぐことを忘れていた(2:10)。イスラエルの民は、出エジプトでの神の御業、荒野での不思議な御業、先祖が受けた恵みを忘れ、他国の神々に心奪われて行くのだが……。それは何故か？

この民は、神の御業、神の恵みを自分の事として、自分に対する神の栄光として仰ぐことが出来ないでいる。出エジプトの出来事が昔話、荒野で40年間養ってくださった不思議な出来事が、今の彼らにとって人ごとであり、おとぎ話であり、出エジプト、荒野の出来事の中に自己不在としていた。その状況であるならば、彼らが神を仰ぎ見ること、神を礼拝することは到底できないわけである。このことは、今の私たちにも問われていることでもある。あの出エジプトの出来事の中に、あの荒野での出来事の中に私たちは居る者か？ 聖書の出来事の中に自分を置くこと、自分の身を置くことはあるのか？ イエスの言葉を、私への語りかけの言葉として聞いて行くことはあるのか？ 私たちの信仰は、そのようにして育み、そのようにして恵みが増すのだ。聖書の出来事の中に自分の身を置く時、私たちは慰めを受け、時に励まし、勇気を受け、時に躓きを受けることもあろう。御言葉が神の生きた言葉としてあるからこそ、私たちは一喜一憂し、御言葉にゆさぶられて行くのである。

この民は何に心奪われ、他国の神々に従い、仕え、礼拝してしまったのか？ 彼らが心奪われて行くのは、他国の経済力、軍事力、国力に心奪われて行く。見るからに美味しそうな果実に目がくらみ、レンガやアスファルトという最新技術に心奪われて行く。その他国の神々がまるで真の神であるかのように思わされて行く。この世の力こそ神であるかのように思わされて行く。民は、この世の力に神を見てしまった。

私たちがこの世の力に魅せられる時、神の国は遠のくように思う。この世の力に身を置く時、「主よ、御国を」という祈りは生まれて来ない。私たちが「主よ、御国を」という祈りが湧き出てくる時、私たちの信仰の一つのバロメーターとして見ることが出来るのかと思う。

今日、ウンケー(旧暦お盆)として先祖を迎える行事に追われることのようにだが、一つ大事にしたいことは、先達の方々が歩まれた歴史を大切にしつつ、時にその歴史に身を置きつつ、歴史を重んずることが先祖を大事にすることであろうと思う。(神谷)